

## 教育における国民的要素の必要性

鈴鹿短期大学教授 林 繁 男

教育とは何かという問いに対しては、さまざまな角度から、いろいろの定義が為されているが、私は最も包括的なものとして、「教育とは、人間形成の営みである」と定義したい。

人間も他の生物と同じく、自然成長力というものを有し、自然の儘に放置しておいても、ある程度の成長発展は可能であると考えられるが、然しそれは、精々野生物としての成長範囲を越えることはできないのであって、厳密な意味における人間ではあり得ない。単に肉体的成長のみでなく、精神的成長を遂げて、合理的な知性活動や社会的、道徳的性格を有するに至って始めて人間ということができると考える。ドイツの哲学者イマヌエル・カントの言葉にも、教育とは人間を人間にする作用であると解することのできる説明があるが、彼の考え方によれば、人は誰でも、生まれ出た当初から幼少時代は、理性的活動も道徳的活動も充分に行われず、正に幼少時代の人間は他の自然物、野生の動物等と変らないということができる。これを自然人と名づけてもよいと思う。然るに、家庭における父母の躾や学校における教育指導が行われるにつれて、次第に人間に特有の性能が発揮されてくるものである。合理的な知性活動や道徳的な社会活動を為し得る人間を文化人と呼ぶことができるならば、教育は自然人を文化人にまで作り上げて行く仕事であるということができる。カントはこのように考えていたと思う。

我が国の教育という文字から考えても、父母や教師が、無知で未成熟な子供達に対し、さまざまな知識を与えたり、行動面において、一定の規律に従って行動し得るように躾を為すこと、更に身体的に正常な発育を遂げるように養護を加えることを意味している。

英語の Education という言葉は、日本語で教育と訳されているのであるが、この言葉は人間に本来具有されている能力、潜在的な可能性を引出すこと、または引上げることを意味しているものである。教育はこの潜在的可能性を発揮させていくはたらきであるというのである。自然に放置しておくのではなく、教育作用を加えることによって、人の生来有する天分、才能、個性というものを開発していくことが教育というものであるというのである。

以上のことによっても、教育とは何かということが理解できると思うが、然し、無目的でこのような知性の開発とか、道徳性の向上とかが為されるわけがない。教育という仕事は、意図的、計画的に為されるものであるということは、一定の目的または目標を定めて、合理的方法によって、この目的を達成しようとしているものであるといえる。

我が国の教育の基本を定めた教育基本法には、その第1条、教育の目的というところに、「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人

の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた、心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と、我が国の教育の目的が何であるかということを書いている。この法文には、我が国の教育の目的は一言で言えば人格の完成であるということをはっきり述べている。そして、教育によって完成されねばならない人格というもの、または理想の人間というものは如何なる要素を具備した、どのような性格を有する人間なのかということについて述べているのである。特に法文の末尾のところは「国民の育成を期して行われなければならない。」という言葉で結ばれている。

いうまでもなく、この教育基本法は、民主主義の精神によって定められたものであり、民主主義の理念というものが、教育基本法のすべての規定に一貫しているものである。

私はこの教育基本法の示す教育の目的が、充分具体性をもって理解されることが必要であると思うものである。即ち、人格の完成または理想的な人間というものが、抽象的な概念としてでなく、完全な日本人、理想的な日本国民という言葉によって理解されなければならぬと考えるものである。

人間は誰でも、抽象的な個人でなく、特定国家の一員であり、国民である。人類社会への貢献も国家が媒体となっているもので、個人から一足飛びに人類、世界にというわけにはいかない。完全な人間の形成、人格の完成は国家の中で、国民教育を通して為されるものである。国家の中において、その国家の歴史伝統に即して、行われるべきものである。

国民教育というものは、国民的特色を抜きにした抽象的で空漠な世界人をつくるものであってはならない。

太平洋戦争に破れ、久しく悲惨な生活を経験した我が国民の中には、敗戦の苦痛や国民的誇りの喪失、敗戦をもたらした過去の日本社会の制度への批判等さまざまなことが原因となって、日本人でありながら日本的な性格を負った文化や風習を嫌い、これを軽んずる風潮や、祖国意識が稀薄化したような人達も多くなったのであった。

然し、日本人が日本国民として特色ある文化を創造し、世界人類のために寄与するには、自国の文化や国民性をよく自覚し、自分の国家を愛し、自国の文化を尊重する心なくしてできるであろうか。勿論、戦争中に行われたような無批判的に、自国の文化や国民性等について、国民に「神国意識」や「最優秀民族意識」を植付けようとしたような教育であってはならないので、自国の長所も短所もよく自覚させて、優れた外国文化や国民性等については謙虚な精神でこれを学びとろうとする態度を養うような教育でなければならない。我が国の歴史を見ると、我々は、我等の祖先が、自国の文化の優秀性を認めながら、同時に東洋諸国や欧米諸国の文化や文明を摂取して、自国の成長、発展に努力してきたことがわかるのである。儒教、仏教、キリスト教から、政治、経済の思想や制度、科学技術から芸術に至るさまざまな領域に亘って、外来文化を積極的に取り入れて来たのである。島国人民としての我々日本人には、自分達のこしらえたものの粹、美点を保守していく精神を強固にもっていると同時に、他国家、他民族のこしらえた文化を「舶来もの」として憧れ尊重する気持が強い。これは我が国民性の一

つでもある。教育においては、自国の文化の長所をよく自覚させると同時に、積極的に他国の文化を取り入れていこうとする精神や態度を育成しなければならないと思う。次ぎに、愛国心の問題について述べてみたいと思う。愛国心というと、真ぐに戦争と結合して考えたり、軍国主義思想を連想する人もある。然し、我々はもっと広く愛国心というものを考えなければならない。人は誰でも何れかの国家に所属し、国民として生存しているものであり、各国家はその位置や地勢、気候等の自然的、地理的条件も異っているし、また社会的、歴史的条件においても相違している。従って、そこには、それぞれ異なる国民性が形成されるのである。従って国民によって創造される文化も自ら特色を有するものとなる。

同じ民族が、同じ土地で、同じ言語を用い、同じ制度や風習の中で、長い歴史生活を営む場合、自分の国家に対して強い愛着心を懷き、また国民同志が「同胞」として強い親愛感と結合的精神を有するようになるのは極めて自然のことであるといえる。平素は誰でも、国家に対する意識は薄く、無意識、無反省的状态にあるようであるが、一度祖国を離れて外国に旅行することがあったり、何かの理由で異国文化の中で生活しなければならない場合には、強く国家意識というものが生起するものである。まして戦争というような自国の運命が存亡の危機に立つような時には、何人も強烈な国家意識が生じ、社国に奉仕し、祖国を守らねばならぬという祖国への忠誠心が湧き起って来るのである。愛国心という戦争のことが思い出されるという理由はここにもある。

然し、愛国心は平素においても必要なものである。世界人類の平和を理想とする現代においても必要なものである。平和社会の中において人々は自分を磨き、自己の職務に専念し、あらゆる面において国民生活の充実発展に努力することが、その儘にして愛国心といってよい。武器を持って敵と戦う時のみ、愛国心というものが必要であるというような狭い考え方をしてはならない。現代の愛国心は、平和的な国家、社会の形成のために、また文化的な国家建設のために、各人が自己の職域を通して活動するところにあると考える。

国を愛する心、国民文化を尊重する心、国民生活の発展と充実を願う心、国家への忠誠心等、愛国心というものは、さまざまな言葉で表現されている。

愛国心の養成とか、愛国心を高める教育というと、直ぐに国家主義とか軍国主義思想と結合して、民主主義に対する反動思想で危険なものと受取る人達もあるようであるが、これは愛国心というものを狭く、特定の時期に強調された誤った思想と混同しているものであると思う。

軍国主義といえば、極端な国家主義と結合したもので、即ち、自国の利益を保持しようとして他国の存在を無視し、利己的な目的達成のために、武力を行使することを是認する思想のことである。他国や他民族の存立を危くしても、自国に有利であればよいという国際道徳を無視したもので、排除しなければならない国家的利己主義である。我々はこのような過去の植民地主義時代の間違った国家主義を世界から除去しなければならない。

このような時代の愛国心は、現代の国際的民主主義に基づく人類の福祉と世界の平和を目指す思想から著しく離れたものである。我々は自国を愛し自国民の生存を重視するのと同じよう

に、他国家や他国民の生存や幸福を重んじなければならない。現代は各国がそれぞれの特色ある文化を創造し、政治、経済、その他の面において、相互の協力と互恵の精神をもって、平和共存を理想とする時代である。従って、愛国心といっても、過去の世界におけるような、自国中心の愛国心であってはならない。

正しい意味の愛国心の養成は如何にして行われるべきかということは、教育活動の面において、いろいろと検討されねばならぬ問題であると思う。小、中学校の学習指導要領の中にも愛国心のことが記されているし、また道徳の時間の指導要領の中にも、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽さなければならないという項目が示されている。学校における地理、歴史の授業は児童生徒に国民的自覚を与える上で重要なものであると思う。

その他、国民的祝日と定められている日の取扱い方についても、教育上もっと有効な扱い方が必要なのではないかと考える。祝日の意味も充分わからぬ儘に、ただ旗日だから明日は休日というだけでは、無意味な気がする。

また我が国の各地方で伝承的に行われている地方色の豊かな諸行事等も、児童、生徒に郷土愛の精神を培い、引いては国家愛というものに結びついていくものであると思うのである。最近はその地方でも、古い伝統的な行事が余り重視されないで、過去の古い時代の遺物として軽んぜられ、実施しても形式も簡略化され、昔に比べて関心も薄れている感じがするのである。然し我々は、時代は変遷し、社会の情勢も変化しても、我々の祖先がそのような行事を創めた往時の所以とか趣旨をよく考えて、これを時勢に合わぬからといって廃止していくということは避けるべきだと思うものである。

過去のもの、古きものはすべて無価値であり、新らしいもののみが真理であると考えることの誤りを反省したい。

戦後の日本社会は、国家社会の制度の万般に亘って、史上かつてない大変革が行われ、国民のものの考え方や価値観というものも、極めて複雑多様化して来ているので、教育上においても、いろいろと困難な問題も多い。然し、我々は、我が国の国民教育が正しく行われていくために、欠如している面、補充すべき点を反省して最善の努力をしなければならないと考えるものである。